

第十三回本郷ふじやま公園古民家歴史部会歴史散策(金沢八景)

平成 17 年 12 月 15 日

平成 18 年 07 月 06 日(木) 金沢八景駅前 10:10 集合 10:20 出発

雨天の場合は翌週 7 月 13 日(木)に順延します。

10:20 出発

10:40

11:20

12:00

金沢八景駅前－①帰帆橋－〔④乙舳の帰帆〕－②元伊東博文別荘－③野島公園展望台《昼食》

13:15

13:30

14:00

14:10

④野島稻荷神社－⑤染王寺－⑥夕照橋－〔⑦野島の夕照〕－〔⑥平潟の落雁〕－⑦瀬ヶ崎－

14:20

15:00

15:20

⑧平潟湾プロムナード－⑨金龍禅院の飛び石－〔⑧内川の暮雪〕－⑩金沢藩陣屋跡－

15:30 解散

神奈中大船き金沢八景バス停解散

9:29

10:00

10:10

(参考) 公田神橋－八景バス停－京急八景駅前

一口メモ

①帰帆橋 乙舳町 4 地先

江戸時代は民家もまばらでこの辺りで東京湾から乙舳へ帰る帆掛け船が望めたのであろう、金沢八景の一つ〔乙舳の帰帆〕を反対側から望める所に架かる橋からこの名が命名されました。

②伊東博文別荘 乙舳町 1 7

明治の元勲、伊東博文別荘の記念碑と建物が残っています。

③野島公園展望台 野島町 2 4

海拔75mの展望台からは晴れていれば富士山が間近に見られます。眼下には金沢八景野一つ

〔⑦野島の夕照〕が望めます。対岸には近代設備の日産自動車テストコースがあり運が良ければ覆面車両のテスト走行を見ることが出来ます。

④野島稻荷神社 野島町 2 3

祭神正一位稻荷大明神 日本三大稻荷・豊川・伏見・笠間の内伏見稻荷の系統です。のしじまの総鎮守で鎌倉時代安貞元年(1227)阿波守長島惟忠の発願にり、その子修理佐頼勝が創建したと伝えられています。境内には神明社・船玉社・秋葉神社・金比羅神社・天満宮・公大神宮が祀られています。古老に寄れば万治年間(1658~60)野島の南端に紀州大納言徳川頼宣公の別邸があり、塩風呂御殿と称していたということです。稻荷神社は御殿の東北に向いており、鬼門の守り神として頼宣公の厚情を受け社殿造営にも力を入れたそうです。

⑤染王寺 野島町 5-1

入真言宗野島山染王寺 本尊正観音菩薩 創建は永徳二年(1382)比丘尼了意野島山に庵を結んだのが始まりだそうです。境内に永徳の年号を刻んだ了意の宝篋印塔があります。かつて野島浦には同寺の他円明院・正覚院がありましたが、円明院早くに廃寺となり、又正覚院は明治40年に染王寺へ合併しました。何れも龍華寺の末寺でした。

元禄元年から享保十六年(1688~1731)にかけての染王寺住職供養塔が2基、正覚寺住職供養塔2基都合4基、何れも施主手習子と銘が刻まれています。此の筆子塚は平成5年横浜市地域文化財史蹟にしていされています。

山門前に六地藏・庚申塔と並んで念仏供養塔が建っています、舟形光背に西ノ念仏中間女十七人逆修(生前に自分達の死後の冥福を祈ったもの)野嶋村元禄二己巳八月吉日(1689)とあります、300年も前に女性ばかりの念仏仲間十七人が造立した石塔もまた珍しいものです。

⑥夕照橋 野島町 1 地先

金沢八景の一つ【⑦野島の夕照】を望む場所に架けられた橋でこの名が付けられました。

⑦瀬ヶ崎 六浦町侍従川の河口

瀬戸神社の向い平潟湾の南東に延びる半島背梁が武蔵と相模の国境で一帯は岩盤で、戦前まで石工を職業とする家が多く古くは鋸山の採石をはじめ、近代では鷹取山の石切場を開くなど東京湾の石工の拠点出もあつたらしい、瀬ヶ崎には義経と同様に兄頼朝に疑われた源範頼が建久四年(1194)修善寺に幽閉されました、梶原影時の討手を受け自刃したといわれていますが、太宰寺の寺伝では鉈切まで逃れ海に向かった太宰寺に入って自害したとあります。範頼の菩提寺と伝える太宰寺は初め瀬ヶ崎172(玄関東学院付属小地内)にありました。同寺裏山には江戸時代後期に茶屋四望亭が設けられ野島水道に出入りする舟を眼下にして、反対側から金沢八景を一望する絶景が眺められたといえます。室の木裏山に熊野権現の祠があり、熊野山伏が拠点としたことも想像されます。瀬ヶ崎は野島水道のミナト(水門)でミナトと呼んだ資料があると聞きます。麻布善福寺の了海の流れをくむ教忍・良空がミナトセカサキに道場を構えたと記録があります。時宗過去帳に明徳2年(1391)遊行上人が瀬ヶ崎で乗阿弥陀仏という人物に結縁した記録があるそうだこうした念仏聖達の集まるところでもあったとか。円覚寺も鎌倉公方の寄進でここに勝福寺を建立ミナトの利権を手中に収めていたらしい、公方の祈願所として諸公事が免除されていたが中世に廃絶し旧地も定かでわない。奥州探題^{シバアキモチ}斯波詮持は鎌倉在住を命じられ、市内ではなくこの地に居館を構え「瀬ヶ崎御殿」と呼ばれました、当所から奥州への海路確保を念頭に置いた可能性が高いです。最後は公方と対立し奥州に逃れる途中敗死した、遺児小山若犬丸も六浦で処刑された、六浦2丁目に供養塔があります。15年(1940)海軍追浜飛行場造成のため丘陵は削られ裏側の木の室集落は強制退去させられました。桂村の海軍燃料廠と同様、昔日の面影はまったくなくなりました。瀬ヶ崎は六浦の歴史的に取って、見落とすことの出来ない重要な場所です。

黒船来航に備え江戸湾にお台場建設の時こ八景からも砂利を採取し運び出しました、と聞いて

いますがこの辺りかも知れません、史実が確認出来ませんでしたので、うわさ話として聞き流して下さい。

江戸小石川療養所の赤ひげ先生(小川^{ショウセン}笙船)が瀬ヶ崎村が気に入り別荘を構え、晩年3年間をここで過ごした死期が迫り江戸に戻り、遺体は都内に納めたが遺言で当時瀬ヶ崎村にあった太寧寺(海軍の接収で片吹町に移転)に齒を納めました。

⑧平潟湾プロムナード 柳町平潟湾沿い

このプロムナードから望む平潟湾一帯は金沢八景の一つ〔⑥平潟の落雁〕といわれる景勝の地です。

⑨金龍禅院 瀬戸10

臨済宗昇天山金龍院、本尊聖観音座像ほか宝冠の釈迦如来像奥重文の方厩禅師等身大座像が祀られています。昔寺の硯から龍が昇天したからと伝えられています。本堂右奥に飛び石と云われる大石がある、伊豆の三島神明がこの石の上に飛来したという、大石の上に三島神明を祀る祠があります。参道入り口に「八景一見之地飛石」の碑がある、金沢四石の一つで昔は右奥岩山山頂は金沢八景は勿論富士山まで見えたので九覧亭といわれた、文化九年(1812)地震で現在地に転落したといわれています。

⑩金沢藩陣屋跡

江戸時代は武州^{カネザワハン}金沢藩の藩領でした、金沢藩は米倉氏を藩主とた大名で久良岐郡六浦に金沢陣屋を構えていました。武蔵國・相模國・下野國の三ヶ国に合計一万二千石の領地を持つていましたが、小藩のため陣屋だけで城は持てませんでした。陣屋は金沢八景駅より追浜へ向かいすぐ右手の谷戸・北は円通寺下から西上行寺裏手南は泥牛庵東は金竜院大門当たりで三方を峻険な丘陵に囲まれ一方は海を擁した一帯です。

江戸近郊という地域性から幕府天領や旗本領の多い中、市域に根拠地をもつ唯一の大名としてきわめて特異な存在です。

米倉氏は甲斐國武田氏の家臣でしたが、同氏滅亡後家康に仕えたました、当初は旗本であったが貞享元年(1684)当主昌尹が五代將軍綱吉に重用され、下野國都賀郡皆川(栃木市)に陣屋を構える一万五千石の大名となりました、昌尹死去の際に次男忠直に三千石を分知し、二代目新藩主の長男昌明は一万二千石を継承しました。四代目忠仰(保教)＝(何故か柳沢吉保の子が四代目に入ってきました、この辺に何か歴史の曰く因縁があるのかも知れません)忠仰が享保七年(1722)に、陣屋を金沢に移転し文字通り武州金沢藩が成立しました。

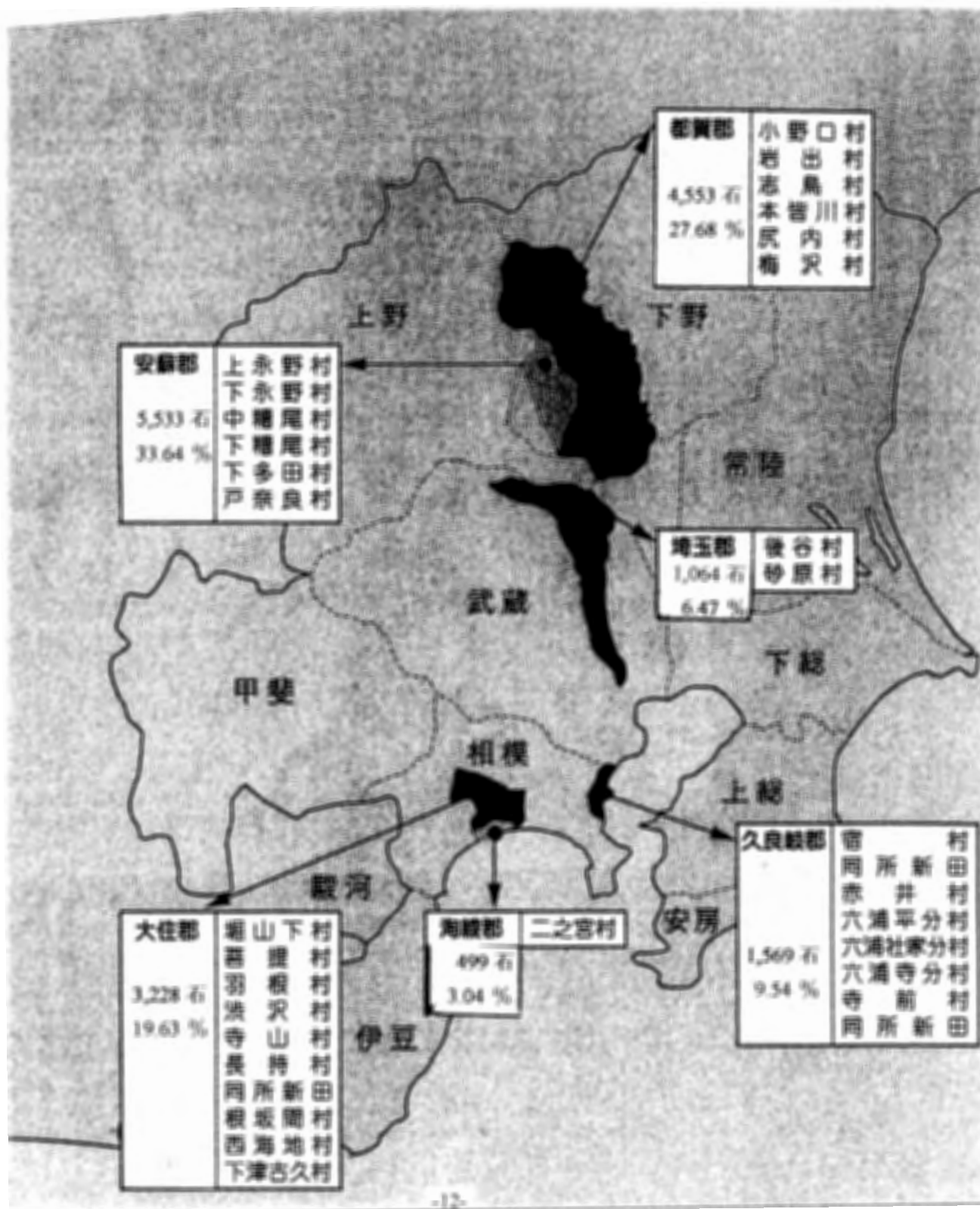
笠間の生実藩も特異な存在ですが、こちらは下総を根拠地とした城持大名で、いささか状況が異なりますが、このような地域性の中で両藩共明治四年の廃藩置県まで藩政を維持してきたことには共通点があるのか興味のあるところです。

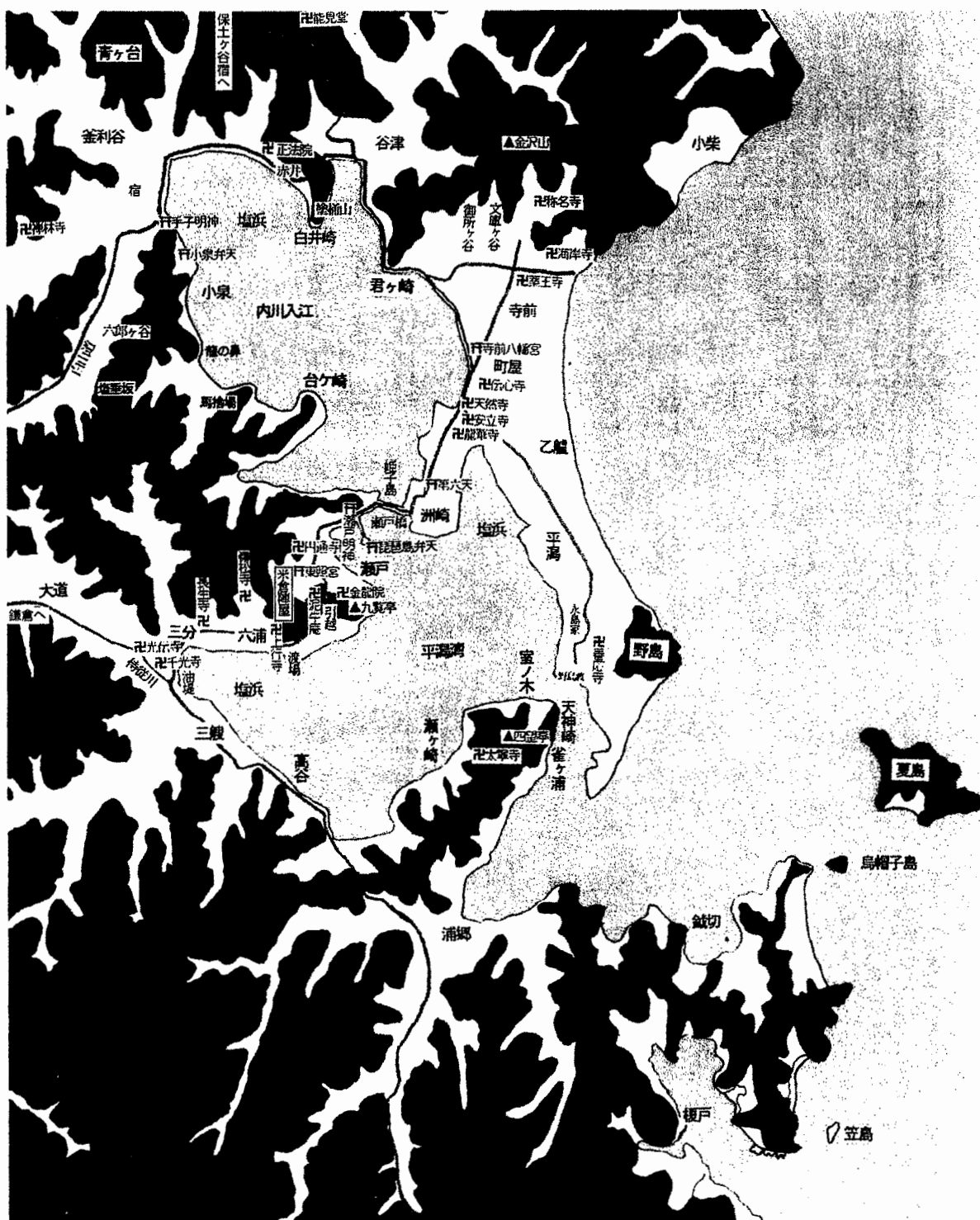
藩主米倉氏は甲斐武田の家臣で滅亡後、家康の旗本になる、五代綱吉の時大名となり、貞享元年(1684)都賀郡(栃木市)に陣屋を構える。(小藩のため城持ち大名ではない)

享保七年(1721)関東の要衝であるこの地に陣屋を移す、伊豆下田から浦賀に船番所が移転した時であり、しかもこの時の当主は養子で入った柳沢吉保の子忠仰であった、なにやら政略のきな臭さを感じるのは思い過ごしであろうか。

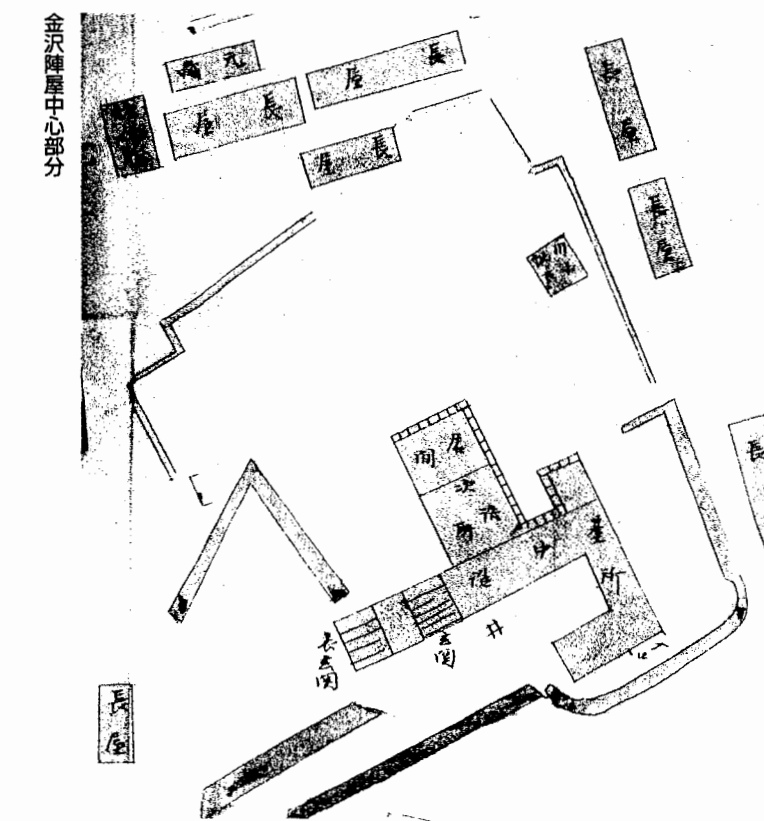
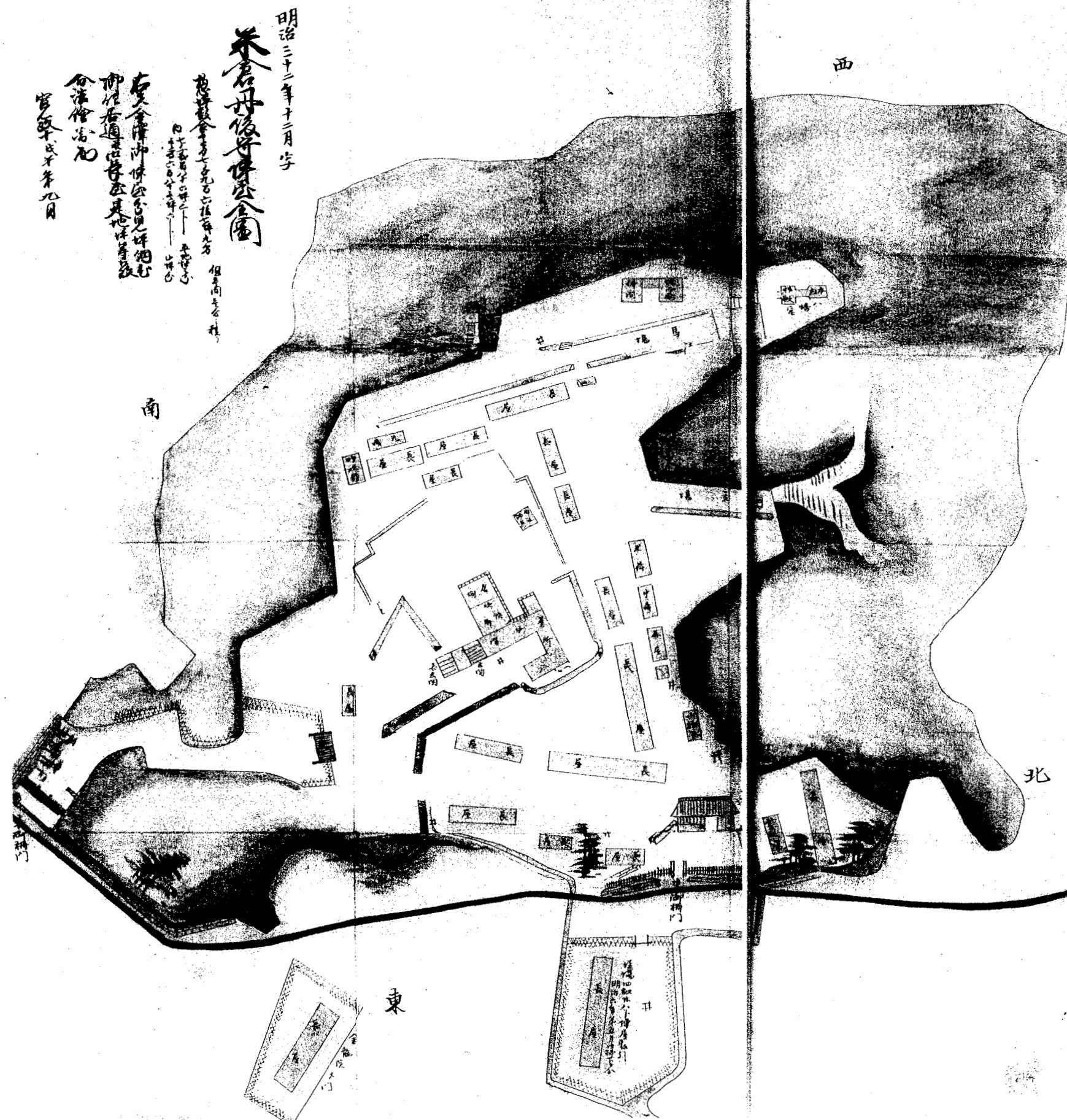
以後明治まで連綿としてこの地に構えていた。

笠間が（鎌倉の押さえとして？）生実藩の藩領として明治まで一藩支配に在ったことと符合して考えると何か一脈通じる政策が読み取れないだろうか。如何でしょうか？





註：神奈川県立金沢文庫『金沢八景』口絵所収の「金沢八景要図」をもとに若干の修正を加えた。



第十三回行程案内図

